

動植物名における表記の多様性 - - 表記の二重構造

神戸山手女子短期大学 井上 道雄

1. はじめに

近年のカタカナ書きの氾濫が、日本語の表記の問題として注目されてきている。会社名や商品名をはじめとして、日本社会の国際化にともなって、外来語・外国語のカタカナがあふれている。また、動植物名は、常用漢字の漢字制限により、表の範囲内は漢字表記し、表外漢字は原則として、カタカナ表記される方向にある。この動植物名のカタカナ表記がカタカナ書きの氾濫をもたらしている原因の一つであるとの指摘もある(朝日新聞 1994/01/14)。

動植物名は、漢字制限による表内・表外漢字の、いわば表記の二重構造を典型的に反映すると推測される。つまり、表記の二重構造は、常用漢字表を基準として漢字表記と仮名表記の書き分けを強いることになる。動植物名では、それが漢字(表内)とカタカナ(表外)の書き分けのため、特に表記の多様性(ゆれ)が際立つと考えられる。

本稿では、この動植物名の表記形態に焦点をあて、漢字制限による同一カテゴリ内での表記の二重構造について、主観的表記頻度を指標として分析する。そして、その表記の二重構造がもたらす多様性について検討する。

2. 動植物名の主観的表記頻度

浮田・杉島・皆川・井上・賀集(印刷中)の行なった主観的表記頻度調査には、全評定項目 750 語のうち動植物名は、241 語である。全体の 32.1%にあたり、相当数の動植物名が含まれている。このことは、われわれの日常の生活において多くの動植物が身の周りであることを示している。そして、241 語のうち漢字 1 字で表記される語(犬)は 115 語(15.3%)、漢字 2 字以上で表記される

語(穴子・紫陽花)は 126 語(16.8%)であった。

漢字 2 字以上の語には、表内漢字のみで構成される語(油虫)が少なく、表内と表外漢字が混在している。本稿の目的から、漢字 2 字以上の語は除外し、漢字 1 字の動植物名のみを対象に分析した。

また、人名用漢字 166 字のうち動植物名を表わす漢字は、主観的表記頻度の評定項目として、漢字 1 字の動植物名 23 字(藤・鯉)が含まれていた。これらは、漢字使用の目的が本来の動植物名の意味カテゴリとは異なると思われることから、常用漢字の表内・表外の分析からは除外した。ただし、人名用漢字については、後に検討することとする。

以上の点を考慮して、漢字 1 字の動植物名を常用漢字表の表内と表外漢字に分けて、主観的表記頻度の表記型ごとに分析したものが Table1 に示されている。そして、表記型ごとの熟知性の評定についても合わせて示した。表内と表外漢字における表記型の違いに注目して結果を見ていく。

表内漢字の動植物名 26 語は、並立類(漢字・ひらがな・カタカナの 3 表記とも 50%以上と評定された項目)が 19 語(73.1%)とその大部分を占めている。全調査語 750 語での並立類(99 語)の比率 13.2%に比べても、動植物名で並立類の比率が明らかに高いことがうかがわれるだろう。残り 7 語は、漢字表記を優位とする語(漢字型・漢字優位型・漢字カタカナ型)である。カタカナでも優位に表記されると評定された語は、そのうちの 1 語のみ(稲)であった。

他方、表外漢字の動植物名 66 語は、並立類が 17 語(25.8%)と全体の 4 分の 1 である。表内と比べて、その比率において大きく異なっている。また、漢字表記を優位とする語は、漢字型(雁)と漢字優位型(瓜)がそれぞれ

れ 1 語のみである。それに対して、ひらがな・カタカナ表記を優位とする語は、ひらがな型 4, カタカナ型 2, ひらがな優位型 6, カタカナ優位型 13, ひらがなカタカナ型 8 であり、表外漢字全体の 55.0% を占めている。この結果は、表内語と比べて、表外語の仮名表記が優位になされていることを示している。

表内と表外漢字でいま一つ大きく異なる点は、分類不可類である。分類不可類は、3 表記のいずれにおいても 50% を越える評定がなされなかった項目である。表内漢字では、全くないのに対して、表外漢字では 14 語(21.2%)と多くを占めている。

3. 動植物名の表記方向

主観的表記頻度による表記型の結果は、表内漢字の動植物名に、表外漢字に比べて並立類が多いことを示した。これは、表内漢字の動植物名において、そのほとんどが漢字・ひらがな・カタカナの 3 表記でなされていることを示している。即ち、表内漢字の動植物名の表記は、表外漢字に比べてより高い表記の多様性が見られる。常用漢字の範囲内は漢字表記で書けるのであるが、漢字による単一表記の方向ではなく、表記の多様化が生じていることを示唆している。しかし、並立類以外の表内漢字は、ほとんどが漢字表記を優位とする表記型であることから、表内の範囲内では漢字表記の方向も見られる。

表内漢字の 3 表記への多様化に比べて、表外漢字の動植物名は、ひらがな・カタカナ表記への方向性が示唆された。つまり、表内漢字とは異なり、表外漢字では、カタカナとひらがなを優位とする表記型が多く見られたことから明らかであるだろう。表外漢字は原則としてカタカナ表記であるが、この結果を見る限りでは、カタカナ表記のみでなく、ひらがな表記の方向があることを示している。

人名用漢字について見てみよう。人名漢字の動植物名 23 語は、漢字型 1(桐)、ひら

がな型 1(杏)、漢字ひらがな型 1(栗)、漢字カタカナ型 1(鯉)、漢字優位型 5(葵・鷹)、並立類 10(鹿・鳩)である。これらは、並立類と漢字を優位とする表記型がほとんどであり、表内漢字での表記型とほぼ同じ傾向を示した。従って、人名用漢字においても表内漢字と同様に、より強い漢字表記の方向づけをもった、表記の多様化が生じていることを示唆している。

4. まとめ：表記の二重構造

動植物名は、同じ意味カテゴリ内で、常用漢字表を基準として漢字とカタカナに書き分けるといった、文字表記するうえで特殊な語である。本稿は、この表記の二重構造に注目して、主観的表記頻度の表記型から表記の多様性を検討した。

表内漢字の動植物名は、漢字・ひらがな・カタカナの 3 方向で表記され、表記の多様化が示唆された。表外漢字では、ひらがな・カタカナで主に表記されていることを示し、仮名表記への方向性が示唆された。

これらの表内・表外漢字の方向性を考えあわせると、表内漢字の動植物名は、表外漢字に比べて、漢字表記の優位性を示している。同様の結果は、人名用漢字の動植物名でも示された。他方、表外漢字の動植物名は、仮名表記の優位性を示したが、特にカタカナ表記の優位性を示すものではなかった。

動植物名は、日常生活に密着したことばであり、古くから馴染みのある言葉が多い。日常生活での言語感覚を強く反映すると言えるだろう。いわば bottom-up 型の表記過程を反映すると考えられる。それに対して、例えば新聞の表記基準に見られる様に、常用漢字表の基準は、まずその規則に基づいて表記を規定するという意味では、top-down 型の表記過程と言えるだろう。動植物名では、同一カテゴリ内でこの二つの表記過程が存在するため、よりいっそう表記の多様化をもたらしているものと言えるのではないだろうか。

動植物名の常用漢字表内・表外における表記型（人名用漢字を除外）

表記型	表内漢字				表外漢字			
	語数	表内率	熟知性	項目例	語数	表外率	熟知性	項目例
単一類								
漢字	2	7.7	3.41	菊竹	1	1.5	2.10	雁
ひらがな					4	6.1	2.77	鶯燕阜橙
カタカナ					2	3.0	3.45	蚤鱒
優位類								
漢字優位	4	15.4	3.27	蚊蚕桑柳	1	1.5	3.21	瓜
ひらがな優位					6	9.1	2.81	鯖莖筍鱈
カタカナ優位					13	19.7	2.77	鮑烏雉鮫
二表記類								
漢字ひらがな								
漢字カタカナ	1	3.8	3.09	稲				
ひらがなカタカナ					8	12.1	3.34	鱒鰻鷓鴣
並立類	19	73.1	3.52	犬芋牛馬	17	25.8	3.38	蟻莓鰯兔
分類不可類					14	21.2	2.89	蛾椋鰈櫛
合計	26				66			